

能力に対する満足感に変わる。その満足感は、たとえば家具職人が繊細なアンティーク家具を再生させたときに感じるものだったり、理科の教師が小学五年生に原子の概念をひらめきのように理解させたりときに感じるものとよく似ている。他者の助けになることにも部分的にはつながっている。また、技術を磨いて難しく入り組んだ問題を解決できるようになることにもつながっている。技術の上達によってアイデンティティが確かなものになる。臨床家にとって、治せない病いをもつ患者は自分が何者であるかをもっとも脅かすような存在である。

生まれ落ちたその日から、私たち全員が老化しはじめる。この人生の悲劇から逃れるすべはない。この事実を理解し、受け入れている人もいるだろう。私の場合も、亡くなったり、亡くなりつつある担当患者が夢に出てくることはもうなくなつた。しかし、だからといって、治せないことに対処する方法を身につけたわけではない。治せる能力ゆえに成功している専門職に私はついていない。治せる問題ならば、医師はそれに対して何をすればよいのかを知っている。治せないということに対して十分な答えを医師が持ち合わせていることがトラブルや無神経さ、非人間的な扱い、言語を絶する苦しみの原因になっている。

死すべき定めを医学的経験にするという実験はまだ二、三〇年の歴史しかない。まだ未熟なのだ。そして実際の結果は、実験に失敗しつづつあることを示す。

この本は、死すべき定めについての現代の経験を取り扱う。衰え死ぬべき生物であることが何を意味するのか、医学が死という経験のどこを変え、どこは変えていないのか、そして人の有限性の扱い方のどこを間違えて、現実の取り違えを起こしてしまったのかを考える。外科医の臨床を十数年経験し、中年期にさしかかった自分自身からみても、今の状況は私にとっても患者にとっても耐えがたいものである。しかし、

同時に答えはどうあるべきかは私にもわからないし、そもそも適切な答えがあるのかどうかすらわからない。しかし、私には作家として、また科学者としての信念がある。ペールを剝がし近くから見ることでも、もっとも迷わせるものは何か、変なものは何か、受け入れがたいものは何か？ について人は理解できるようにになると考えている。

わずかな間だけでも高齢者や終末期の患者と一緒に過ごせば、援助すべき相手に対して医学がどれだけ失敗を犯しているかがわかるだろう。命が尽きていく日々は治療によって乗っ取られてしまう。脳は混濁させられ、何かを得られたかもしれないごくわずかなチャンスも吸いとられてしまう。施設の中で人は死ぬまでの日々を過ごす。ナーシング・ホームやICUの中で。人の顔が見えないルーチン化された治療手順によって人生において大切なものすべてから引き離される。老化と死という経験を率直に検討することを躊躇することで、私たちは患者の苦痛を増し、患者がもっとも求めている基本的な癒しを与えないようにしている。人生の最後の日までをどうすれば満ち足りて生きていけるかを全体から見ると視点が欠けているから、私たちは自分の運命を医学やテクノロジ、見知らぬ他人が命じるまま、コントロールするがままにしている。

この本を書いたのは、何が起こったのかを理解したいという望みからである。死すべき定めは、危険な題材にもなる。避けられない衰弱と死について医師が書くということだけでも嫌がる人がいるだろう。この話題は、どれだけ書き方に気をつけたとしても、社会が病者と老人を犠牲にしようとした時代の亡霊を多くの人の脳裏に浮かび上がらせるだろう。しかし、もし病者と老人が今すでに、犠牲者になつていたら？ 生死のサイクルがもつ非情さを私たちが受け入れず、拒むことで犠牲になつていたら？ としても、他にもっとよいアプローチがあり、それは私たちの目の前にあつて、見つけてもらうのを待っているとしたり？